

ひきつけはじいじ

今回は、子どもの病気の中で、お母さんに大きな不安を与えるひきつけ(けいれん)について考えてみましょう。

ひきつけとはどんな状態をいうのでしょうか。意識が無く、体が硬直したり、ガクガクする状態を、ひきつけと呼びます。筋肉が硬直し呼吸が抑制されるため、顔色が悪くなったり、チアノーゼと言つて唇などが紫色になります。また泡を吹いたように見えたり、よだれを垂れ流したりすることもみられます。目の前にいる子どもが、今にも命にかかわるように見えてしまいます。

子どもは、子どものひきつけの大部分を占める「熱性けいれん」について話しましょう。これは、生後4ヶ月から6歳ぐらいまでに、10人から20人に1人の割合でみられ、決して珍しい病気ではありません。発症は1歳台が多く、また男児に多い傾向があります。特徴は、病名が示すように発熱に伴ってみられることです。熱性けいれんの起こしや

すきは、ウイルスの種類(突発性発疹症、インフルエンザ等)、熱の高さ(多くは39℃以上)、急な熱の上昇に関係すると言われています。また遺伝的要素も関係し、親御さんや兄弟にけいれんの既往があることが多いといわれています。突然熱が上がる場合には、ひきつけで初めて発熱に気付くこともあります。持続は長くても20分以内で、多くの場合は5分以内に止まります。唇の色が悪くなったりするため、傍にいますお母さんたちは、とても長い時間を感じるかもしれません。熱が出るにより繰り返したりしますが、普通は障害を残すことはない良性の病気と考えられています。けいれんと間違われやすい状態に、悪寒戦りつ(おかしんせんりつ)があります。これは急に熱が上がる時に、寒げとともに体ががたがた震えることです。意識があり呼びかけに答えることで、けいれんと区別が出来ます。

さて、ひきつけを起こしたらどうしたらよいでしょうか。お母さんが慌てても、ひきつけは止まりません。そこでお母さんがすることを箇条書きにしておきます。

1. おでこに手を当てるか、体温を計り熱のあることを確認します。
2. 起こった時間を確認し、衣服をゆるめ、吐物を誤嚥しないように顔を横に向けてください。
3. どんなひきつけなのか、観察しながら治まるのを待ちます。ひきつけの形には、ガクガクする以外に、硬直することもあります。舌を嚙むのを心配して、指や割りばしなどを口に入れてはいけません。ゆするなどの刺激を与えないようにして、待つことが大事です。ほとんどは5分以内に止まりますが、止まる気配がなく不安が強ければ、救急車を呼ぶこともやむを得ません。
4. 止まって、意識が戻って普段と変わらないようであれば、そのまま様子を見てみましょう。そして止まった時間を確認しておきます。

子どものけいれんのほとんどは、熱性けいれんですが、けいれんは重症な病気のサインであること忘れずに下さい。脳炎や脳症、髄膜炎などの場合は、時間が長い、繰り返し、けいれん前後で意識がおかしい、意識が戻らない、訳のわからないことを口走るなどがあれば、急いで小児科を受診してください。

最後に、けいれんを文章にするのが簡単ですが、冷静にしていることは難しいものです。お子さんがひきつけを起こした時はこの記事を思い出して、お母さんがしつかりすることが、とても大事なことです。

ナビゲーター

小児科専門医

川村 和久

仙台市在住



医療法人社団かわむらこどもクリニック医院長。日本の小児科サイトを運営する、言わずと知れた小児科専門医。「お母さん達の心配・不安の解消」を理念に、日々の診療にあたった。宮城県小児科医会理事。2001年には医師として大変名誉のある日本小児科学会パネリストとして選ばれた。
AERA(アエラ)臨時増刊号 日本初! かかりつけ医を探すガイド「日本の家庭医 08」(7月5日号)の町のお医者さん1435人の中で紹介される。
<http://www.kodomo-clinic.or.jp/>

★「サンタさんがお休みが欲しいからかな〜」 美亜(5歳)

Mamagon 04